文心雕龍札記(四)

斯波六郎

正緯第四

「正緯」とは、緯書を正しく認識する、つまり、緯書に対する誤れる評価を正す、といふ意味であらう。特にこの篇を設けたのは、後漢以来の風を承けて、当時もまだ緯書が広く行はれ、且つ不当に高く評価されてゐたからに違ひない。隋書経籍志に「至宋大明中、始禁図讖、梁天監已後、又重其制」とある。禁ぜざるを得なかつたのは、それが盛行してゐたからである。

またこの篇を宗経の次に置いたわけは、緯が経に配せられてゐたからであらう。

この篇で彦和の言つてゐる「緯」とは、図・讖をもこめての広い意味を持つものである。そして彦和は、その広義の緯を、真のものと偽のものとにわけて考へてゐたのではないかと思ふ。乃ち河図・洛書、堯の緑図、文王の丹書などの如き、天が聖人に示せる瑞応といふものの存在せしことを信じて、それらを真の緯とし、後世の伎数の士の手に成つたものを偽の緯としてゐたやうである。

古来、図讖の語があり、図緯の語があり、また讖緯の語がある。図と讖と緯とは、ほぼ同じ内容を持つものの如くでもあり、またおのおの異なるが如くでもある。それでこの三者の関係について略述しておく。

後漢書光武紀に見える「図讖」の語に、李賢は注して「図、河図也、讖、符命之書、讖、験也、言為王者受命之徴験也」といひ、蔡邕の郭有道碑文に見える「図緯」の語に、李善は注して「図、河図也、緯、六経及孝経皆有緯也」といふ。この二注に拠れば、図は河図であり、讖は予言書の類であり、緯は経に配せられた書といふことになる。つまり図と讖と緯とはそれぞれ別物と見なくてはならない。

では何故に「図讖」と並称せられ、「図緯」と並称せられ、また「讖緯」と並称せられるのか。それはこの三者に共通せる性質があつたからであらう。共通の性質とは何かといへば、隠語めいた書き方をし、予言めいた意味を含ませてをるのがそれである。これを発生的に考へれば、図と讖とが比較的に早く生れ、後にその図讖の風を経書に附会して緯書が作られたものと思ふ。だから緯書なるものは、その内容から見れば殆んど図讖と同質といつてよく、ただそれが経に配せられたが為に特に緯と名づけられたまでのことであらう。

尤も讖と緯とは別物であつて同一視すべきではないとする説がある。このことをやや条理だてて論じたのは、明の胡応麟の四部正譌の上に見える説が恐らく最初であらう。

その後、清の四庫全書総目提要巻六や、徐養原の緯候不起於哀平辨（詁経精舎文集巻十二所輯）に更に詳論せられた。讖と緯との発生した時代をたどり、その意義を考へれば、この二者は別物であること正に右三説のいへる通りである。けれどもまた、徐養原も一面に於ては、図・讖・緯の三者は「同

実異名」と指摘せる如く、本質的には区別しかねるものではある。それで古来この三者は殆んど同様のものと見なされてをり、彦和もまたこれを同一視して、緯と総称したのである。

この篇の構成は次の如く見られよう。

「夫神道闇幽」より「偽亦惑焉」までの十二句を第一段とし、緯書の発生を論じてをる。

「夫六経彪炳」より「緯何豫焉」までの三十八句を第二段とし、緯書の偽を論証してをる。

「原夫図籙之見」より「論之精矣」までの四十句を第三段とし、緯書は孔子の作に非ざることを論じてをる。次の四節にわけられよう。

「原夫図籙之見」より「序録而已」までの十四句は、孔子は前聖の符命を序録しただけであることをいふ。

「於是伎数之士」より「朱紫乱矣」までの十二句は、伎数の士が緯書を多く偽造した為に真偽の区別がつきにくくなつたことをいふ。

「至於光武之世」より「亦已甚矣」までの八句は、後漢に於ける緯書の盛行をいふ。

「是以桓譚疾其虚偽」から「論之精矣」までの六句は、後漢の四賢のなせる緯書の批判を挙げて、第二段の論と呼応させる。

「若乃羲農軒皞之源」より「故詳論焉」までの十五句を第四段とし、偽の緯書も、文章の益になることをいつてをる。

「夫神道闇幽、天命微顕」

「神道」の語は、夸飾第三十七にも「夫形而上者謂之道、形而下者謂之器、神道難摹、精言不能追其極、形器易写、壮辞可得喩其真」とあつて、形而上の「道」を謂ふことは明かであるが、その「道」に「神」の字を冠せしめたわけはわかりにくい。といふのは、「道」を神秘なるものと見て「神」の字を冠せしめたともとれるし、神秘なるものの司る道といふ意味で「神」の字を冠せしめたともとれるからである。夸飾篇の用法は「神秘なる道」と解して通ずるが、ここの「神道」は、「天命」と対して用ひられてをること、また下文に「神教」の語があることを考へあはすと、どちらかといへば、神秘なるものの司る道といふ意味であらう。

「闇幽」「微顕」の二語は、周易、繫辞下の「夫易、彰往而察来、而微顕闡幽」に拠つたものであること疑ふ餘地はない。がしかし難解な語である。韓康伯は繫辞に注して、「易無往不彰、無来不察、而微以之顕、幽以之闡、闡、明也」といふ。つまりこの二語をば、「微よりして顕にゆかしめ、幽よりして闡にゆかしむ」と解したものの如くである。この韓康伯の解は、十分に納得することのできないものであるが、仮りにこの解に副つて、彦和のこの二句の意味をとれば、「神道は幽なるものによつて明なるものを著し、天命は微なるものによつて顕なるものを示す」といふことにならうか。そしてその実際を述べたのが次の「馬竜出而大易興、神亀見而洪範燿」の二句であると見られる。

ところで気になるのは繫辞の「微顕闡幽」の意味である。朱子本義の説の如く、この辺に誤りがあるとするのも一見解である。しかしもしこのままの語形で意味をとるとすれば、韓注は何としても牽強の譏を免れまい。尤も韓康伯の拠れる繫辞は、或ひは「顕微闡幽」、または「微顕幽闡」に作られてゐたのかも知れないが、それを証する資料がないから、韓注を牽強と評したのも、現行のものと同じかつたとしての立場でのことである。

それはともかく、「微顕闡幽」の語をすなほに、「顕を微にし幽を闡にす」と読んでよいのではないか。現にわが北村闇然先生はそのやうに読んでをられる（周易十翼精義二五四頁）。のみならず唐人にも既にそのやうに読んでゐたものがあつたかと思はれるふしがある。といふのは、杜預の春秋左氏伝序に「微顕闡幽」とあつて、繫辞の文に拠れること明かであるが、正義にはそれを「微其顕事、闡其幽理」と釈してをるからである。

尤も「顯を微にし幽を闡にす」と読めば、「顯を微にす」と「幽を闡にす」とは、思考の流れ方が互に相反することになり、そこに不自然さを感ずる。この不自然さを感じたが為に韓康伯はさう読むことを避けたのかも知れない。しかし同じ繫辞下に「其言曲而中、其事肆而隱」とあつて、「曲而中」と「肆而隱」とも、その思考の流れが同一方向をとつてをるとはいへぬ。すると「顯を微にし幽を闡にす」の言ひ方があつても、敢へて奇とするに足らないであらう。

「微顯闡幽」について上述のやうに考へてみると、彦和のここの用法も、必ずしも韓康伯の説に従つたものとは言ひきれなくなる。

さて「神道」と「天命」とは、ほぼ同じ内容であつて、一は抽象的な理法の上から呼び、一は具體的な作用の上から呼んだものであらう。また「幽」と「微」とは、同じく捕へどころのない奥深さを意味してゐて、一は姿の上からいひ、一は働きの上からいつたものであらう。

「馬龍出而大易興、神亀見而洪範燿」

「馬龍出」は河図を指し「神亀見」は洛書を指すこと言ふまでもない。彦和は緯書の起源を河図洛書と関係づけて考へたのである。

上文の「闡幽」「微顯」を「幽なるものによつて明なるものを著し」「微なるものによつて顯なるものを示す」の意味に解すれば、ここの「馬龍出」と「神亀見」とは「幽」と「微」とに当り、「大易興」と「洪範燿」とは「闡」と「顯」とに当ることにならう。

またもし上文を「幽を闡にし」「顯を微にす」と読めば、「馬龍出で」「神亀見はれた」ことが「幽」であり、「大易興り」「洪範燿いた」ことが「闡」であると彦和は見てゐたとともに、「大易興り」「洪範燿く」といふ「顯」なることを「馬龍出で」「神亀見はる」といふ「微」なることによつて示したものと見てゐたと解しなくてはならない。

「但世叟文隱、好生矯誕」

「叟」ははるかにと訓じならはしてゐる。穀梁伝、文公十四年に「過宋鄭滕薛、叟入千乘之国」とあつて、その注に「叟猶遠也」とある。「文」は、河図洛書にある文字のやうなものをいひ、「隱」は、意味が隱れてゐて理解しにくい、つまり隱語めいてゐることをいふ。「世叟」と「文隱」とは同格である。

「好生矯誕」は、「はなはだ(または、このんで)矯誕を生じ」と読むよりほかあるまい。では「矯誕」とはどんなことかと考へてみると、言語の構成法は必ずしも論理を以て律し得ないとはいへ、この「矯」と「誕」との結合に、ある不合理さを感ずる。そこで注意すべきは唐写本に「矯託」に作られてをることである。「矯」は「誣矯」の「矯」で、いつはる、詐称するの意味であり、「託」は「仮託」の「託」で、かこづけるの意味であるから、この二字の結合には不自然さを感じない。つまりこの二字が一語を表はして、偽物を誰かにかこつけて真物らしく詐称するといふ意味になる。それでは、「はなはだ(または、このんで)矯託を生ず」とはどんなことか。「矯託したものが多くでてきた」といふ意味だとしてしまへばそれまでであらうが、しかしこれまたしつくりしない気がする。そこでここに一つの臆説を出す。

それは「好生」の二字を一語と見るべきではあるまいかといふことである。すなはち「好生」は、「俗生」(晋、王沈、釈時論)、「蒙生」(梁、陶弘景、答朝士訪仙仏両法體相書)などとほぼ同様の構成をとれる語で、好事者といふ意味をもつものではなからうかと思ふのである。もしこの臆説に拠つて「好生矯託」を解すれば、(世は叟に文は隱なるをよいことにして)「好生が矯託したので」といふ意味になり、甚だすらりとゆく。

「真雖存矣、偽亦憑焉」

真物は確かに存在してゐたけれども、それを利用して偽物も出た、といふ意味であらう。「真」とは河図洛書の類を指し、「偽」とは、後世のいはゆ

る緯書を指す。

ここにことわつておきたいことがある。上述の如く、この篇の「馬龍出而大易興、神亀見而洪範燿」を、「神道闡幽、天命微顕」の一現象と解し、且つ「神道」を、「神秘なるものの司る道」と解すれば、原道第一の札記で、「幽賛神明、易象惟先」について述べておいたところと、いささか矛盾することになる。その為に原道篇の札記を訂正しなくてはならない。しかし原道篇の札記のみならず、微聖篇の札記にも、宗経篇の札記にも、補訂すべき點がいくらかあることに気づいてをり、今書きつつあるこの篇の札記に於ても、間もなく考へなほさねばならぬことが出て来ようから、何れ適当な機会に、それらすべてにわたつて筆を加へるつもりである。

「夫六経彪炳、而緯候稠疊」

「彪炳」は、あやもやうのはつきりと美しいさま。主として六経の文章についていふ。これに対して、下文「孝論昭晳」の「昭晳」は、すぢみちのはつきりしてをるさまで、主として孝経論語の内容についていふ。ただしかし、ここの「彪炳」と下文の「昭晳」とは、互文的用法になつてゐるので、六経は彪炳だけであり孝論は昭晳だけであるといふのではなく、六経も孝論も、文章はあやあつて美しく、内容ははつきりとわかるといふのである。そして、だからそれらに対する緯書など不必要だといふ意味を含む。その気分が「而」の字に表はれてをる。

「緯候」とは、六経にそれぞれ幾つかの緯書があり、そして尚書の緯書の中に尚書中候といふのがあるので、かういつたのである。この語は、後漢書の方術伝序にも見える。

「稠疊」は、きつしりと重なりあつてをるさま。謝霊運の過始寧墅詩に「巖峭嶺稠疊、洲縈渚連綿」とある。これに対して、下文「鉤識蔵薤」の「蔵薤」は、盛んに垂れさがつてをるさまをいふ。ここでは二語ともに、多いさまを表はす。

「孝論昭晳、而鉤識蔵薤」

「晳」を唐写本は「晳」に作る。一体、「晳」の字は説文に無く、段玉裁は「晳」の字の省體だといつてをる（説文晳字注）。「晳」（セキ）は、色の白いことである。これに対して「晳」（セッ・テッ）は、説文に「昭晳、明也」とあつて、はつきりとてらしかがやくことである。

ところで「昭」と熟語となるのは、「晳」よりも「晳」の方がふさはしい。当に唐写本の「晳」に従ふべきである、なほ、微聖第二の札記、「文章昭晰以象離」の条を見よ。

「鉤識」とは、孝経の緯書に鉤命訣といふのがあり、論語の緯書には比考識・撰考識など識の字のついたものが多いので、かういつたのである。

「按経験緯」

このままで意味は通ずるが、唐写本には「按」を「酌」に作つてある。「酌」だと、経から証拠を酌みとつてといふ意味になり、経を本體とする考へ方が一層よく表はされる。

「蓋緯之成経、其猶織綜」

「成」は、「成就」「成功」の「成」であつて、経の役割を十分なしとげさせる意味であらう。ここにも経を本體とする考へ方が出てをる。通検本の校注に、この「成」の字について、「成疑作於、蓋渉下文布帛乃成而誤」といふ。いかにも尤もな説のやうではあるが、しかし、緯が経を成すといふ言

ひ方は、釈名 釈典芸にも「緯、囲也、反覆囲繞、以成経也」とある。はたいとでも、経は軸にあり緯は杼にあつて、経が本體である。この句は、経書と呼び緯書と呼ぶ、その語自體の上からの議論であることに注意したい。

「絲麻不雑、布帛乃成」

「雑」は、混雑で、いりみだれること。ここは、きぬいとにしてもあさいとにしても、経と緯とがいりみだれないでこそ、の意である。こことよく似た言ひ方が、斉梁間の人、陶弘景の発真隠訣序に、次の如く見える。「経者、常也、通也、謂常通而無滞、亦猶布帛之有経耳、必須銓綜緯緒、僅乃成功、若機関疏越、杼軸乖謬、安能斐然成文」

「今経正緯奇、倍擿千里」

ここの「緯」は、六経孝経論語の緯書、すなはち偽の緯書を指す。「奇」は「正」に反することである。正である経と奇である緯とでは、両者の齟齬すること、恰もはたおりのたていととよこいととが混雑する如きものだ、といひたいのである。そこで「倍擿千里」の句が出て来たわけである。ここでは経書と緯書との内容の上から論じてをる。つまり、上文では名の上から論じ、ここで内容の上から論じて、以て偽の緯書は、その実がその名に副はないことを衝いたのである。

「倍擿」については、孫詒讓は、背迕すなはち、そむきさかふ意だと説いてゐる（札迻巻十二）。「倍」は「背」に通ずると見、また「擿」は「適」に通ずると見て、方言巻十三に「適、牾也」とあり、その郭注に「相触迕也」と訓解してあるのに據つたのである。参考までに加へておけば、「適」が「さかふ」の意味となるわけについて、王念孫は次の如く説いてをる。「適之言、枝也、相枝梧也、枝適語之転、小雅、我行其野伝云、祇適也祇之転為適、猶枝之転為適矣」（広雅疏証、釈言）。

「倍擿」の語は他に用例を見ないが、ここは孫氏の説で通ずるから、今それに従ふ。なほ、「擿」を唐写本は「適」に作る。そのことを併せ考へると、もと「適」か「摘」かに作られてゐたのを、後人が「倍適」（または倍摘）の意味を解しかねて、妄りに「擿」に改めたのが今本であらう。

「其偽一矣」

この句から「其偽四矣」までの四つの「矣」を、顧千里はすべて「也」に校改してをるといふ（范氏引）。蓋し改悪であらう。「矣」は、客観的事実を自ら確認する気持を表はすに用ひられる。彦和は恐らく、さういふ気持を表はすつもりでこの字を用ひたのであらう。

「経顕聖訓也、緯隠神教也」

この「聖訓」も、下文の「聖訓宜広」の「聖訓」も、ともに唐写本は「世訓」に作る。「聖訓」のままで勿論意味は通ずるが、しかし夸飾第三十七に「雖詩書雅言、風俗訓世、事必宜広、文亦過矣」とあるのを考へあはせれば、唐写をあながち誤写とは言ひ切れない。

ここの「緯」は、彦和の考へてゐた真の緯、すなはち河図洛書の類を指す。

「神教」とは、天神が示した教の意であらう。鄭玄の六芸論に「河図洛書、皆天神言語、所以教告王者也」（毛詩、大雅、文王序正義引）とある。この二句は、従来「経は顕にして、聖訓なり。緯は隠にして、神教なり」と読まれてゐる。それで意味は通ずるけれども、しかしまた「経は聖訓を顕にせるなり。緯は神教を隠にせるなり」とも読み得るのではないか。

唐写本にはこの二句を「経顕世訓、緯隠神教」に作つて、二つの「也」の字が無い。そこで唐写本に従へば、「経顕世訓、緯隠神教、世訓宜広、神教宜約」の四句が緊密に結合して一聯を形成し、その一聯が、下文の「而緯多

於経、神理更繁」の一聯に承けられる構成となる。二つの「也」の字の無いのは必ずしも誤脱ではなくて、或ひは無いのが、もとの姿かも知れない。

ところで「経顕世訓、緯隠神教」が、もしもとの姿であるとすれば、これは「経は世訓を顕にし、緯は神教を隠にす」と読むよりほかあるまい。

「而今緯多於経、神理更繁」

この「緯」も偽の緯書を指す。「神理」は、真の緯書の特質をここへ持ち出したのである。

「有命自天、迺称符讖、而八十一篇、皆託於孔子、則是堯造緑図、昌制丹書」

この一節の論理の運び方は、了解に苦しむ。いま仮りに次のやうに見ておく。「天より命が授けられてこそ、それを符讖といふのだのに、今ある八十一篇の緯書は、すべて孔子の作だとされてをる。それならば、堯が受けた緑図は堯が造つたのだといつてよく、文王昌が受けた丹書は文昌王が作つたのだといつてよいことになるではないか。」

彦和は符讖の存在を信じ、それを真の緯書と考へてゐたのであらう。そして堯の緑図、文王の丹書は、符讖に属するとしてゐたのであらう。

「八十一篇」は、緯書の数である。荀悦の申鑒、俗嫌篇に「世称緯書仲尼作也……然則八十一首、非仲尼之作矣」とあり、また後漢書張衡伝所載の張衡が順帝に上つて図讖を禁絶せんことを請うた疏に「至於王莽簒位、漢世大禍、八十篇何為不戒」とある所の八十篇も、八十一篇を概数で示したものであることは、その李賢の注に「衡集上事云、河洛五九、六芸四九、謂八十一篇也」とあるにて知られる。これらの記述に拠つて、後漢時代から緯書が八十一篇あつたことがわかる。

後世のものではあるが、隋書経籍志には、「河図九篇、洛書六篇は、黄帝より周の文王に至るまでに受けた本文であり、別に孔子に至るまでの九聖が、それを増演して意を広めたものが三十篇ある」と記されてをる。隋志にいふ九篇と六篇と三十篇との計が四十五篇となつて、李賢注に引く所の河洛五九、すなはち五九の四十五篇と一致する。すると、李賢注に引く所の河洛四十五篇といふのは、河図洛書などの符命の本文と、それらを後人が増演したものとの合計であらう。

また隋書経籍志に、「七経緯が三十六篇あつて、すべて孔子の作といはれてをる」と書いてある。この三十六篇の数も、さきに挙げた張衡伝の李賢の注に見える所の六芸四九、すなはち四九の三十六の数と合する。しかしこの李賢の注は六芸であり、隋志は七経であつて、その間に一経の差がある。ところで後漢書儒林（樊英）伝に「河洛七緯」の語があり、その李賢の注には、易緯・書緯・詩緯・礼緯・楽緯・孝経緯・春秋緯の七種類を列挙してある。すると、張衡伝の李賢注に見える六芸の緯は、孝経緯をいれてゐないのだとわかる。さうすれば、張衡伝の李賢の注に見える三十六篇と、隋志にいふ三十六篇とは、数は一致するけれども、その内容は全同ではなかつたと推測せられる。

「皆仮於孔子」。緯書が孔子の作であるとせられてゐたことは、後漢の人の記述の中にも見える。すなはち、桓譚の新論に、「讖出河図洛書、但有兆朕、而不可知、後人妄復加増依託、称是孔丘、誤之甚也」（意林引）とあり、また荀悦の申鑒、俗嫌篇に「世称緯書仲尼作也、臣悦叔父故司空爽辨之」とある。更にまた彦和より後のものではあるが、隋書経籍志にも「説者又云、孔子既叙六経、以明天人之道、知後世不能稽同其意、故別立緯及讖、以遺来世」とある。この「説者」は何人を指すか明かでないが、恐らく昔から伝はつてゐた説者であらう。

このやうに、緯書は孔子の作であると古くからいはれてゐたのであるが、これはそもそも誰が言ひ出しのであらうか。或ひは緯書そのものの中に、そのことが書かれてゐたのではなからうか。かう考へて緯書の残文を探したとこ

ろ、次の二条を得た。偽孔安国尚書序の正義に、鄭玄が書論を著し、尚書緯に依つて云へるものとして、「孔子求書、得黄帝玄孫帝魁之書、迄於秦穆公、凡三千二百四十篇、断遠取近、定可以為世法者百二十篇、以百二篇為尚書、十八篇為中候」を引く。すなはち尚書中候が孔子の手定に係ることを明言してをる。また文選巻四十六、顔延年、三月三日曲水詩序の李善注に「孝経鉤命決曰、丘乃授帝図、掇秘文」を引く。この「掇秘文」とは、孝経鉤命決だけについていへるものでなく、恐らく讖緯一般についていへるものであらう。

右の尚書緯と孝経鉤命決との二条に拠つて推せば、讖緯書の文中に、それが孔子の作である旨を述べた記事が、他にもまだ多く有つたものと思はれる。

「是堯造緑図、文王制丹書」。堯が緑図を受けたことは、尚書中候に「帝堯即政七十載、……栄光起河、休気四塞、白雲起、廻風揺、竜馬銜甲、赤文緑色、臨壇止霧、吐甲図而蹙」（御覧八〇引）（又御覧八〇引鄭注云、栄光五色、従河出、美気四塞、……甲所以蔵図、赤文色而緑地也、霧亦止也、蹙音帯、去也）とある。

文王昌が丹書を受けたことは、尚書中候に、「季秋之月甲子、赤雀銜丹書入豊、止於昌戸、再拝稽首受」（毛詩、大雅、文王序正義引）とあり、尚書帝命験（史記、周本紀正義、及び御覧八四引）にもほぼ同様の記事がある。また易是類謀に「文王比隆興、始覇、伐崇、作霊台、受赤爵丹書、称王制命、示王意」（毛詩、大雅、文王序正義引）とあり、春秋元命苞に「鳳凰銜丹書於文王之都」（同上引）とある。

「商周以前、図籙頻見」。「図籙」は、上文の「符讖」と同じ内容であつて、河図洛書、堯の緑図、文王昌の丹書の類を指す。

「偽既倍摘、則義異自明」

孫詒讓の札迻には、この「倍摘」と、上文の「倍摘千里」の「倍摘」とを同一語として、「背迕」の意味としてをる。上文に於ては孫氏説で通ずるが、ここはそれでは通じない。

この句は、緯書の偽なることを四点から論じた上文のしめくくりである。それで黄注に言へるが如く、「倍」は「掊」の誤と見るべきであらう。「掊摘」は、「発摘」「抉摘」などと同じ構成の語で、さきあばくの意。つまり、緯書の偽なることを十分さきあばいたといふのである。

「義異」とは、緯書なるものの義が経書と異るといふのであらう。そこでここの二句の意味は、「今の緯書は孔子に託して経書に配せられてをるけれども、上述の如く偽物であるとあばいた以上、緯書のいみあひは、経書とは異つたものであることが自然に明白となる」となるかと思ふ。

「経足訓矣、緯何豫焉」

この「訓」は、「聖訓」の「訓」ではなく、「訓解」の「訓」であらう。すなはち、経書はそれだけで十分訓解できるから、緯書はそれに何の関係があらう、といふのがここの二句の意味であつて、下文「義非配経」の伏線をなす。

「原夫図籙之見、迺昊天之休命」

この二句は、上文の「有命自天、迺称符讖」と呼応する。

「事以瑞聖、義非配経」

「事」は、図籙の見はれるといふその事自體。「義」は図籙のもつ意味あひ、役割。

論語、子罕篇の「子曰、鳳鳥不至、河不出図、吾已矣夫」の孔注に「有聖人受命、則鳳鳥至、河出図、今無此瑞」（敦煌本論語鄭注同じ）とある。孔（鄭）は、聖人受命すれば天が瑞応を下すものとする考へを前提として、論語に注したのであるが、彦和のこの「事以瑞聖」は、孔（鄭）と同じ考へを

本にしたものである。

ここの二句は、対句をなしてをるけれども、意味の重みは上句にかかる。だからすぐ下に、「故河不出図、夫子有歎」と承けてをる。

「昔康王河図、陳於東序」

周の成王が崩じて、子の釗すなはち康王が王位を継ぐとき、その式場に、先王より伝はれる宝物を陣列したのであるが、東序すなはち東の廂には、大玉・夷玉・天球とともに河図を陳列したといふ。事は尚書の顧命篇に見ゆ。この河図は、伏羲氏の天下に王たりし時、黄河から出たもので、歴代これを宝として伝へたのだと、尚書の古注にある。それで彦和は下文で、「故知前世符命、歴代宝伝」といつたのである。

「故知前世符命、歴代宝伝」

「前世」のままでも通ずるが、唐写本は「世」を「聖」に作る。前文の「事以瑞聖」と応ずる点からも、下句の「歴代」の「代」といふ同義語を避ける点からも、「聖」に作つたものが是である。

「符命」の語は、何時頃からおこつたか知らないが、漢書の王莽伝に頻りに見えるものなどが、比較的古い用例であらう。天が或るしるしで有徳者に対して意思表示をなせるものをいふ。ここでは河図洛書の類を指す。上文に出た「符讖」も「図籙」も、この「符命」も、語の成り立ちこそ違へ、意味するところはほぼ同じである。

司馬彪の続漢書に「霊台者、乃周家之所造台也、図書術籍珍玩宝怪、皆所蔵也」（初学記巻二四引）とある。彦和も、前聖の符命は霊台に蔵せられてゐたと思つてゐたのかも知れない。

「仲尼所撰、序録而已」

「序録」は、経典釈文の序録の如きものをいふのではなく、符命の意味するところを陳序して記録せるもの、もしくは図録の意味を陳序せるもの、といふことではあるまいか。桓譚の新論に「識出河図洛書、但有兆朕、不可知」（前引）とある如く、符命といふものがあつたにしても、それは象徴的なきざしが表はされてゐたに過ぎなかつたであらうから、そのやうなものの意味を、孔子が文字に書きかへたのだと、彦和は考へてゐたのであらう。春秋緯に「孔子曰、丘攬史記、援引古図、推集天変、為漢帝制法、陳叙図録」（公羊経伝解詁隠公第一疏引春秋説）とある。これは緯書の説ではあるが、これに似た考へを彦和も持つてゐたのではあるまいか。

「於是伎数之士、附以詭術」

「於是」は、下文の「必仮孔氏」までを支配すると見る。そして孔子が序録を作つたものだから、それをよいことにして、伎数の士の附加せるものをすべて孔子に仮託した、といふ意味に解したい。

ここの二句は、後漢書の桓譚伝所載の、桓譚が讖を抑へ賞を重くせんことを陳ぜる疏に、「今諸巧慧小才伎数之人、増益図書、矯称讖記」とあるのに拠つたもののやうである。

「伎数」は、後漢書の李賢注に「伎、謂方伎、医方之家也、数、謂数術、明堂羲和史卜之官也」とある。

「附」は附益、附加の意。孔子の序録に詭術の説を附け増したのである。

「詭術」は正常にそむいたあやしげな術で、下文の「或説陰陽、或序災異」がそれである。

「若鳥鳴似語、蟲葉成字」

この二句は、上文「或説陰陽、或序災異」の具體例である。

「鳥鳴似語」について、黄注は、左伝襄公三十年の「鳥鳴於亳社、如曰嬉嬉、云云」を引き、范注は、襄公三十年の文と漢書五行志の董仲舒の説とを

引いてをる。しかし、それらが果して彦和の直接に拠つた所かどうか、疑はしい。隋書経籍志に、漢末に郗萌が、図緯雑占を集めて五十篇となし、それを春秋災異と謂つたと記され、且つ春秋災異十五巻が著録せられてゐて、彦和はそれに拠つたのではあるまいか。

「蟲葉成字」は、或ひは漢書五行志（中之下）の左の記事に拠つたのであらうか。

昭帝時、上林苑中大柳樹断仆地、一朝起立生枝葉、有蟲食其葉、成文字、曰公孫病已立、……眭孟以為木陰類、下民象、当有故廃之家公孫氏、従民間受命為天子者、……後昭帝崩無子、……更立昭帝兄衛太子之孫、是為宣帝、帝本名病已、（このことは宋書符瑞志上にも記されてをる）

これに類したことが讖緯の書にも書かれてゐて、彦和はそれに據つたのかも知れない。

「篇條滋蔓、必仮孔氏」

「鳥鳴似語」とか「蟲葉成字」とかの、あやしげな説が出たのであるが、その類の説が次第に条数を増して一篇にまとめられ、更にさういふ篇篇がだんだん多くなり、それらが皆孔氏に仮託せられた、といふのである。そしてこの裏に、それが即ち七経の緯書となつたにほかならないといふ意味を含ませてある。

「通儒討覈、謂起哀平」

「謂」の下に、唐写本は「偽」の字がある。ここは緯書偽作の起りを論じてをる所であるから、「偽」の字が無くてはならない。偽孔安国尚書序の正義に「其緯文鄙近、不出聖人、前賢共疑、有所不取、通人考正、偽起哀平」とあり、また洪範篇の正義に「緯候之書、不知誰作、通人討覈、謂偽起哀平」とある。尚書正義のこの二文は、ともに彦和のここの文に據れること、疑ふ餘地がない。而して「偽」の字がある。

緯書の偽作が前漢の哀帝平帝の頃に起つたとの説は、荀悦の申鑒、俗嫌篇にも見えるが、彦和のこの辺の文は、恐らく、張衡の図讖を禁絶せんことを請うた疏に、「則知図讖成於哀平之際也」とあり、また「則朱紫無所眩、典籍無瑕玷矣」とあるのに據つたものと思ふ。

「至於光武之世、篤信斯術、風化所靡、学者比肩」

この一節は、後漢書方術伝序の左の文と同じ趣旨である。彦和は方術伝序に據つたのであらう。

及光武尤信讖言、士之赴趣時宜者、皆馳騁穿鑿、争談之也、……自是習為内学、尚奇文、貴異数、不乏於時矣

時序第四十五にも「自哀平陵替、光武中興、深懐図讖、頗略文華」といつてをる。

范氏後漢書の列伝に、緯書に通じてゐたと書かれてをる人がしばしば見えるが、范氏後漢書にはそのことが書かれてゐないで、他の後漢書の残文に拠つて、緯書に通じてゐたことの知られる人がある。さつとしらべただけでも、趙典・除稗・李固（以上三人、范書本伝注引謝承後漢書）・孝和鄧皇后（御覧巻一三七引続漢書）・姚俊（文選、閑居賦李善注引謝承後漢書、この人は范書に伝無し）の五人を挙げることができる。

「沛献集緯以通経」

「通経」は、「沛王通論」を撰せることを指す。時序第四十五にも「沛王振其通論」といふ。後漢書、沛献王輔伝に「輔矜厳有法度、好経書、善説京氏易孝経論語伝及図讖、作五経論、時号之曰沛王通論」とある。しかし「集緯」についての具體的記述はない。彦和は何に拠つて言つたのであらうか。

「曹爽撰讖以定礼」

「撰」を唐写本に「選」に作る。「選」の字が是である。後漢書、曹褒伝に「褒既受命、乃次序礼事、依準旧典、雜以五経讖記之文、撰次天子至於庶人、冠婚吉凶、終始制度、以為百五十篇」とある。

なほ、彦和のここの文と直接の関係はないが、樊儵もまた讖記を以て五経の異説を正したといふ（後漢書樊宏伝、及び北堂書鈔巻六一引続漢書）。沛献や曹褒のこととともに、後漢の「乖道謬典」の証とするに足る。

「是以桓譚疾其虚偽」

桓譚の讖を抑へ賞を重くせんことを陳ぜる疏に、「今諸巧慧小才伎数之人、増益図書、矯称讖記、以欺惑貪邪、詿誤人主、焉可不抑遠之哉」とある辺を、主として指して、「疾其虚偽」と言つたのであらう。

「尹敏戲其深瑕」

「戲其深瑕」では通じない。唐写本の「深瑕」を「浮假」に作れるに従ふべきである。「浮假」は、根拠の無いこと。

尹敏は、讖書の決して聖人の作に非ざることを光武帝に申し上げたけれども、とりあげられなかつたので、讖書の欠文のところに「君無口、為漢輔」と書き増しておいた。帝はそれを見て怪しみ、敏を召して問うたので、「臣は、前人が勝手に図書に増損してをるのを見まして、敢へて自ら量らず、竊に万一をこひねがつたのです」と敏は対へたといふ。事は後漢書儒林伝に見える。この「君無口」は「尹」の字を意味する。

「張衡発其僻謬」

「僻謬」は、経典に合しないいつはりごと。張衡の、順帝に上つて図讖を禁絶せんことを請へる疏に、春秋讖、詩讖、春秋元命包などから具體的の例を挙げて、その経典に合せず、また讖相互に矛盾せることを摘発してをる。

「荀悦明其詭誕」

「詭誕」を唐写本は「詭託」に作る。荀悦の申鑒、俗嫌篇に、緯書八十一篇は、孔子の作ではなく、後漢の興る前頃、終張（未詳）の徒の偽作せるものであらうといつてをる（後出）。彦和は恐らくそのことを指したのであらうから、「詭託」が是である。

「若乃羲農軒皞之源」

伏羲・神農・軒轅（黄帝）・少皞らの帝王の始源のことが緯書に書かれてをるといふのである。そのことは春秋の緯書に特に多かつたのであらうと思はれるが、例へば左の諸条の如き類を彦和は指したのであらう。

伏羲女媧神農、為三皇（文選、東都賦注引春秋元命包）

伏者別也、羲者献也、法也、伏羲徳洽上下、天応之以鳥獸文章、地応之亀書、伏羲乃則象作易卦（御覧巻七八引礼含文嘉）

神者信也、農者濃也、始作耒耜、教民耕種、其徳濃厚如神、故為神農也（御覧巻七八引礼含文嘉）

有神人、名石耳、蒼色大眉、戴玉理、駕六竜、出地輔、号皇神農、始立地形、甄度四海、東西九十万里、南北八十一万里（御覧巻七八引春秋命歴序）

軒轅氏以土徳王、天下始有堂室、高棟深宇、以避風雨（御覧巻七九引春秋内事）

黄帝師於風后、風后善於伏羲氏之道、故推衍陰陽之事（後漢書張衡伝注引春秋内事）

炎帝号曰大庭氏、伝八世、合五百二十歳、黄帝一曰帝軒轅、伝十世、二千五百二十歳、次曰帝宣、曰少昊、一曰金天氏、則窮桑氏、伝八世、五百歳、

……（礼記祭法正義引春秋命歴序）。（炎帝は即ち神農、左伝昭公十八年正義「先儒旧説皆云、炎帝号神農氏、一曰大庭氏」）

「山瀆鍾律之要」

「山瀆」は、五岳四瀆の意味に用ひられるが、ここは必ずしもそれに限定せず、広く山川を意味すると見てよいであらう。「鍾律」は、音律の意味と解したい。黄鍾の音律が五声の本となるといふことからか（漢書律歴志上、五声之本、生於黄鍾之律）、または、鍾と律（管）とは音律の基準であることからか（続漢律歴志第一注引月令章句曰、律、率也、声之管也、……於是始鑄金作鍾、以主十二月之声、然後以双、升降之気、鍾難分別、乃截竹為管、謂之律、……）おこつた語であらう。

黄注も范注も、この「山瀆」「鍾律」に注して、遁甲開山図や鍾律災応などの書名を挙げてゐるけれども、彦和は、特定の書のみを指したのではなく、山川や音律、つまり地理や音楽といふ大切なことが緯書に書かれてをることを指摘したのである。

山川のことは、河図緯に特に多かつたであらう。いま残文三条を引いてその例とする。

崑崙山為天柱、気上通天、崑崙者地之中也、地下有八柱、柱広十万里、有三千六百軸、互相牽制、名山大川、孔穴相通（初学記巻五引河図括地象）

崑崙山有五色水、赤水之気、上蒸為霞陰而赫然（文選巻二九張協雑詩注引河図）

崑崙之山為地首、上為握契、満為四瀆、横為地軸、上為天鎮、立為八柱（御覧巻三八引河図括地象）

音律に関することは、楽緯に特に多かつたであらう。いま楽緯残文二条と春秋緯残文一条とを例示する。

聖人往承天助、以立五均、均者亦律調五声之均也（宋均曰、均長八尺、施絃以調六律五声）（文選、張衡思玄賦注及び繁欽与文帝牋注引楽叶図徴）

夫聖人之作楽、不可以自娯也、……故撞鐘者以知法度、鼓琴者以知四海、擊磬以知民事、鐘音調則君道得、君道得則黄鐘蕤賓之律応、君道不得則鐘音不調、鐘音不調則黄鐘蕤賓之律不応、……（続漢礼儀志中注引楽叶図徴）

冬至日、人主与群臣左右縦楽、……人主乃使八士、撞黄鐘之鐘、擊黄鐘之鼓、公卿大夫列士、乃使八能之士、擊黄鐘之鼓、用馬革、鼓員、径八尺一寸、鼓黄鐘之琴瑟、用槐木、瑟長八尺一寸、吹黄鐘之律、聞音以竽補、竽長四尺二寸、……（御覧巻五六五引春秋感精符）

「白魚赤烏之符」

「烏」を唐写本は「雀」に作る。

黄注、范注ともに、史記、周本紀の文を引証してゐるけれども、それはいけない。緯書から引証すべきである。

緯書の残文について「白魚」「赤烏」の見える条をさがせば、尚書中候の「太子発、以紂有三仁附、即位、不称王、渡于孟津、中流受文命、待天謀、白魚躍入王舟、王俯取魚、長三尺、赤文有字、題目下名授右、有火自天、止于王屋、流為赤烏、五至、以穀俱来（御覧巻八四引）がある。これは周の武王発のことを書いたものであるが、蓋し彦和の拠れる所であらう。

ただしかし気になるのは、唐写本が「赤雀」に作つてゐることである。これは単なる誤写とは思はれない。念の為に、やはり尚書中候にある次の一條などを考慮してみよう。「季秋之月甲子、赤雀銜丹書、入豊、止於昌戸、再拜稽首受」（毛詩、大雅、文王序正義引）。これとほぼ同様の一条が尚書帝命験（史記、周本紀正義引）にもある。

さて前引の尚書中候の一条は、周の武王発のことであり、後引の一条は、周の文王昌のことである。もし唐写本を是なりとすれば、彦和は、「白魚」を武王のことから取り、「赤雀」を文王のことから取つたのだとも見られる。

しかし更に考へれば、彦和は、緯書のあちらに「白魚」が出てをり、こち

らに「赤雀」が出てゐることに興味を覚えたのではなく、「白魚」と「赤雀」とを、同一条内に於て、映発させてゐるものがあつて、そこに眼をとめたのであらう。現に下文の「黄銀紫玉之瑞」の「黄銀」と「紫玉」とは、ともに礼斗威儀の同一条に拠つたものである（下に詳説する）。「白魚」と「赤雀」とを映発させ、「黄銀」と「紫玉」とを映発させたことに彦和が意を惹かれたのであつてこそ、下文の「辞富膏腴」がよく生きてくる。

そこで、ここに一つの推測を下せば、前引尚書中候の武王発の一条に見える「赤烏」を、「赤雀」に作つた一本が有つたのではないかと思ふ。といふのは、尚書中候に「維天降紀、泰伯出狩、至于咸陽、天振大雷、有火下、化為白雀、銜籙集于公車」（御覧巻九二二引）の一条があつて、周の泰伯のことではあるが、その「有火下云云」が、前引武王発の条の「有火自天……流為赤烏」と関係があるものの如く、而もここでは「雀」に作られてをるからである。つまり、この泰伯の記事が「雀」に作られてゐることを手がかりとして、そことよく似たことがらを書いてある武王発の条も、「雀」に作つたものがあつたのではないかと推測するのである。

この推測の如く、尚書中候の武王発の一条に、「白魚」と「赤雀」とを映発させたものがあつたとすれば、彦和はそれに拠つたのであらう。或ひはまた別に、今見ることを得ない緯書のどこかに、「白魚」と「赤雀」とを映発させた文があつて、彦和はそれに拠つたのだと考へられぬこともない。

以上は、唐写本の「赤雀」をもとにして推測を逞しくしたのであるが、ともかくも唐写本を誤写としてかたつけてしまふには未練が残る。

「黄金紫玉之瑞」

「金」を、唐写本は「銀」に作る。これも誤写とは思はれない。范注に、礼斗威儀を引証して、「銀」に作るものを是なりとしてをる。范氏説従ふべきである。今本は、後人が「黄金」の語を習見するに因つて、妄りに改めたものであらう。

但し范氏の引いた礼斗威儀の文は、「君乗金而王、其政象平、黄銀見、紫玉見于深山」となつてをるけれども、礼緯残文の輯本を検してみても、このやうな一連の文は無い。有るのは、「君乗金而王、其政平則蘭常生」（文選巻三四、七啓注）、「君乗金而王、則紫玉見於深山」（御覧巻八〇四）、「君乗金而王、則黄銀見」（御覧巻八一二）、「君乗金而王、其政平、則黄金（銀の誤であらう）見於深山」（芸文類聚巻八三）の如く、諸書に分散してをるもののみである。

しかしこの諸書に引かれてをるものは、必ずしもそれぞれ独立せる一文ではなく、恐らくもと連続せる一文があつて、その中から、各書それぞれ必要な部分だけを剰取したのであらう。蓋し范氏もこのやうに考へて、一文に仕立てて示したものと思ふ。けれども、これは寧ろ、「君乗金而王、其政平、則蘭常生、……黄銀紫玉見於深山」に作る方が一層原形に近いであらう。

なほ、「黄銀」とは、鍮石すなはち真鍮のことであると、宋の程大昌の演繁露巻七に書いてある。

「無益経典、而有助文章」

諸子第十七に「然洽聞之士、宜撮綱要、覧華而食実、棄邪而採正、極睇参差、亦学家之壮観也」とあるのと、ほぼ同じ論調であつて、短を棄てて長を採らうとする彦和の態度がうかがはれる。

「是以後来辞人、採摭英華」

唐写本は、「後」を「古」に作り、「採」を「拾」に作る。唐写本の方が、是なのではないか。「後来」といへば、緯書が出て以後、または前漢の辞人に対して、それ以後、といふ意味に解しなくてはならぬが、「後来」の語の古い用法は、今を標準にして、その今より後の意味が普通のやうに思ふ。それでここは「古来」がよいであらう。「古来辞人」の語は、物色第四

十六にもある。また「採摭」でも意味は通ずるが、しかし、もと「採」であつたのを唐写本が「捃」に誤つたとすべき可能性は少く、「捃摭」の語は、事類第三十八にも見えるしするから、ここも「捃」がよいのではないかと思ふ。

「平子恐其迷学、奏令禁絶」

張衡が、順帝に上疏して、図識を禁絶せんことを請うた事実を指す。事は、後漢書張衡伝に見える。「迷学」とは、人をして学問に於て迷はせる、つまり間違つた説を妄信させる、といふ意味であらう。

「仲豫惜其雜真、未許煨燔」

荀悦の申鑒、俗嫌篇に「世称緯書仲尼之作也、臣悦叔父故司空爽辨之、蓋発其偽也、有起於中興之前、終張之徒之作乎、或曰雜、曰以己雜仲尼乎、以仲尼雜己乎、若彼者、以仲尼雜己而已、然則可謂八十一首非仲尼之作矣、或曰燔諸、曰仲尼之作則否、有取焉則可、曷其燔」とある。申鑒の「以仲尼雜己」とは、終張の徒自身の偽作せるものを本體とし、それに往往、仲尼の手がけたものを雜入してをるといふ意味であらう。彦和が「雜真」といつたのは、このことを指す。そしてその「真」とは、彦和に於ては、「仲尼の序録せるもの」を意味してゐたかと思ふ。

「是以古来辞人、……未許煨燔」の六句の構成は、「古来辞人、捃摭英華」の二句が一聯をなし、「平子恐其迷学、奏令禁絶、仲豫惜其雜真、未許煨燔」の四句が一聯をなす。そして後者の四句に於ては、下の二句に重みがかかつてをる。

なほ、言ふにも及ぶまいが、平子が禁絶せんことを奏したのと、仲豫が煨燔を許さなかつたのとは、同時にあつたことではない。

「前代配経、故詳論焉」

この二句は、便宜上、第四段の結びとして扱つておいたけれども、実際は、一篇全體の結びである。従来、諱を以て経に配してゐたから、その非なることを特にここに詳論した、といふ意味であつて、篇題の「正諱」に帰着したわけである。

「栄河温洛」

「栄河」とは、河水から栄光が発したこと。前文「堯造緑図」のところに引用しておいた通り、尚書中候に「栄光起河、休気四塞」とあるが、その鄭注に、栄光とは、五色の光だといふ。

「温洛」とは、洛水が温くなつたこと。易乾鑿度に「帝盛徳之応、洛水先温、九日乃寒、五日変為五色」（初学記巻九引）とある。

「糅其雕蔚」

「糅」を唐写本は「採」に作る。従ふべきである。今本のままでは意味が通じない。「採」の字の誤つたものである。

この句は、本文の「古来辞人捃摭英華」と応ずる。

（三三、一、三）

A Commentary on "Wen-Hsin Tiao-Lung" (文心雕竜) (4)

Rokuro SIBA

"Wen-Hsin Tiao-Lung" (10 vols.) is a work written towards the end of the fifth century; it is the earliest description on literature and rhetoric in China. This work, therefore, occupies the most important position in the history of Chinese literary criticism: yet it has not prevailed so much because of its having many difficult points. Both the terms and the style of writing are very hard to understand, and especially the sentence-construction is so complicated that main difficulty seems to be here. In proceeding my research, I studied first the peculiarities and characteristics of the thought and style of the author of this work and made commentaries on the unique terms and sentence-construction, which I compiled in the form of book. This is a Commentary on Wen-Hsin Tiao-Lung. A part of my studies was published already in" SINAGAKU-KENKYU" No. 10, 12, 15, which this article follows.